

☆あつたらいいなのサービス作り☆


認定特定非営利
活動法人

グループ
ゆう

ゆう通信

39号
2020年
12月発行

ワークスペース 歩°歩°
歩°歩°書房



4月から南中山2丁目の「菓子工房」の隣に、古本のリサイクル・ネット販売工房を開きました。ご寄付いただいた古本を検品（書き込みや破損等の有無）し、ネットや古本市で販売する仕事に、就労支援B型が取り組みます。

ご家庭でご不要になった「本」がありましたらご寄付いただくと幸いです。
(担当：岡部)

— 目次 —

特集／第20回 総会報告	P 2～5
2019年度の振り返り、2020年度重点目標、次世代への事業継承に向けて	
事業 TOPICS／コロナ禍の記憶	P 6～22
【各事業の取り組み・支援物資への感謝】	
NEW職員紹介	P 23
スタッフリレー／第五走者：高齢者介護・障がい居宅支援 澤里 森子	P 23
インフォメーション／くるみん認定・職員募集・介護事業所移転・賛助及びご寄付のお礼	P 24

第20回 総会報告

開催年月日：2020年5月29日
開催 時間：19：30～21：00
会 場：さろん

2020年度の定例総会は、新型コロナウイルスの感染予防の為、書面委任の形態を主に、約15名の参加者で開催されました。(2019年度正会員 77名、書面参加者 53名、当日参加者 15名)

当日は、2019(H31・R1)年度の事業報告及び収支報告案と2020(R2)年度の事業計画及び収支予算案を審議し、全ての案件が承認されました。



◆ 2019年度の振り返り ◆

計画相談は、第三者視点を加味して支援計画を提案し、本人家族を孤立させない伴走者の使命を進めてきましたが、法人内外の事業所間のつなぎ役が評価を受け、ニーズが高まっています。

サンホームでは、育休の3名が復帰し2年目の園長のもとで安定した運営が行われる中、初めて児童発達支援センターの指定管理を行う三法人の理事長と事務局間で情報交換の機会をもち、仙台市との話し合いの場を持つことが出来ました。

ピーターパンは放課後ケアネットワーク仙台とともに、コロナ禍での子どもの学び(学校等)の環境整備を提言しました。また、開所3年目の児童発達支援事業がようやく地域から問い合わせを頂くようになりました。

成人事業の**ほっとスペース歩°歩°・ワークスペース歩°歩°**は、支援期間が就労前から就労後、支援内容は日常生活・就労体験・相談・関係者他機関等連携(家族・病院・^{グループホーム}G・H・企業等)という多様な場面の自立支援事業です。これまで一人ひとりの必要性に沿って、必要な時期に繋ぎ、一貫性をもって支援する形を継続してきましたが、この支援形態の効果を職員間で確認した年度であったと思います。しかし、工賃の額に課題があったため、助成を受けて専門家の支援を受けて継続Bの商品のブラッシュアップを行いました。また、コロナ禍での販売自粛に戸惑う中では、作業所ネットワーク「あがいん」で「福の市」に参加し、改めて連携の心強さと他団体の根性に刺激を受けました。

高齢者訪問介護・障がい児者居宅支援と助け合いは、支援への信頼が厚く、包括からの依頼も高まり続けていますが、経常的な人手不足が課題です。**サロン活動**は毎回盛況で高齢者の地域の居場所になりつつありました。

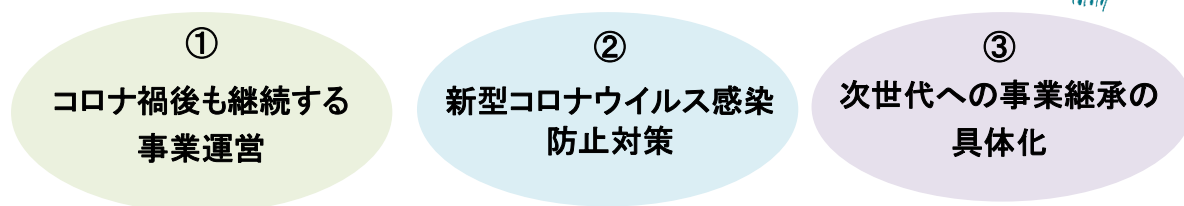
キッチン歩°歩°は、今期、地域の泉病院に弁当と総菜の販売の場を得たことと、ボランティア会員の貢献のおかげで運営が安定してきました。しかし2020年の2月末からの新型コロナウイルス禍において、感染予防を意識した運営に切り替え、「集う」場であったサロン活動や食堂事業等は休業しました。3月から4月にかけては、法人の本部地域のスーパーマーケットで感染者が出たことを受けて、店舗に出入りした職員や利用者さんの自宅待機、更に学校の一斉休校、外出自粛要請等、日々社会の動きとともに揺れ動きました。結果、2019年度前半は収支バランスは好調に推移していましたが後半コロナ禍の影響で通常の事業継続ができず、マイナス決算になりました。

◆ 2020年度の法人全体、各事業の重点目標 ◆

2020年度は、感染状況の収束時期が見通せないなかで、厳しい事業経営が迫られます。終息まで3年程度の時間を要するのではないかと想定し、「事業の継続」を柱に置き、“新型コロナウイルス感染症の予防と対策”に取り組みつつ、必要な人に支援が途絶えない様、普段の日常をなるべく維持できるよう努めていきたいと思っております。また一昨年からの継続課題である「次世代への事業継承」を具体的に進めます。会員の皆様のこれまで以上のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。



●法人全体の重点目標



●各事業の重点目標

各事業	重点目標
サンホーム	① 集団療育での個別療育の展開 ② 進路先との効果的な連携
ピーターパン ふくおか	① 個別特性に応じた集団活動の内容検討 ② 共通ツールを使ったアセスメントの意義と方法を全職員で共有する。
ピーターパン 長命ヶ丘	① 法人内事業所（計画相談・サンホーム・成人支援）と連携した繋がる支援形態・プログラムの検討 ② 家族・地域との連携と情報共有
ほっとスペース しばば	① SAD、特に高機能の方の特性理解とその周知を目指す。 ② ASDの成人当事者(就労者含む)の自立に向けたイメージ作り支援
ワークスペース しばば	① 収支バランスを意識した運営 ② 一人ひとりの特性に添った支援の為の、職員研修と情報共有の強化
計画相談	① 登録者の開拓 ② ライフステージを見通した計画相談の作成。
高齢者訪問介護・ 障がい児者居宅 支援・助け合い	① 支援技術の向上（多様な身体介護、疾病、障がい特性等） ② 感染症禍にあっても、訪問介護等を利用して在宅で生活する利用者の生活の維持を目指す。



次世代への事業

グループゆうは設立から25年を経過し、社会の変化に適応する組織改善が必要になってきました。今期は、2年前から中期計画として取り組んできた「次の世代への事業継承」をすすめていきます。具体的にはリーダーの段階的交代と経営基盤の強化です。また、ゆうの文化である「個々の人権や尊厳を尊重すること」「自分事として支援に向き合う姿勢」や「課題は見つけた人が発信行動する」「戦う相手は内部ではなく社会の理不尽」「立ち位置はいつも弱い側」「自分たちだけで出来ないことは他団体に繋げる」等々が継承出来ればよいと考えています。

なお、コロナ禍で職員全体会議の開催を自粛していることから、アンケートや次世代リーダーによる意見聞き取りを行い、中期計画作りに活かしてまいります。皆様のご協力をお願い致します。



= 事業継承の進め方 =

1) 検討会議…理事会、運営会議、次世代リーダー会議

会議	理事会	運営会議	次世代リーダー会議
会議構成 メンバー	中村祥子 高橋路代 丸登志子 荒井圭子 有路耐子 門馬美代子	理事・各事業管理者、責任者 □介護等：高橋路代、澤里森子 □サホーム： 菅野淑江、赤間ひろみ、成瀬理沙 □ピーターパソ長命ヶ丘： 有路耐子、菅野佳奈美 □ピーターパソふくおか： 荒井圭子、浅野弘絵、阿部和樹 □ワークスペース：高橋辰徳 □ほっとスペース：佐藤裕信 □計画相談：佐藤こず枝	(あいうえお順) 浅野弘絵 佐藤こず枝 澤里森子 高橋辰徳 成瀬理沙
事業継承 関係の役 割・目的	・会議の設置 ・メンバー指名 ・理事会の決定事項の次世代の意見の収集	・次世代リーダー会議の報告相談を受け各事業からの意見を表明する ・法人の運営全体の視点に立って、各事業職員の中期計画への意見を収集する。	・継承に必要な具体的事項の抽出、人的配置の検討 ・理事会や運営会議への協議課題の提案や要望 ・職員の対面聞き取り ・継承に係る研修の受講

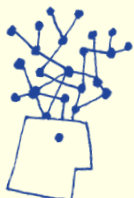
継 承 に 向 け て



2) 継 承 プ ロ セ ス

	理事会・事務局	運営会議 次世代リーダー会議	職員等会員全員
2020・6	<ul style="list-style-type: none"> 理事の業務の洗い出し 管理業務の移行準備 		
2020・8	<ul style="list-style-type: none"> 理事が兼務している管理者業務の継承開始 		
2020・10		<ul style="list-style-type: none"> 研修①(マーケティング) 思考で考える人材確保・定着) 	<ul style="list-style-type: none"> 全職員へのES調査
2020・11	<ul style="list-style-type: none"> 就労規定、給与規定の改訂(案)・人事(案)の作成 	<ul style="list-style-type: none"> 事例研修(他団体事例) 研修②(採用基準) 	<ul style="list-style-type: none"> 次世代リーダーによる職員インタビュー
2020・12	<ul style="list-style-type: none"> 中期計画・人事(案) 2021年度事業計画 収支予算(案) 	<ul style="list-style-type: none"> 人事・就労給与規定等の検討 研修③(コミュニケーション研修) 中期計画(案)検討 中期事業と人事検討 	
2021・1	<ul style="list-style-type: none"> 給与規定の改訂(案)作成 	<ul style="list-style-type: none"> 研修④(マネジメント研修) 各事業で2021年度計画協議 	
2021・2	<ul style="list-style-type: none"> 人事評価の改訂(案)作成 	<ul style="list-style-type: none"> 2021年度各事業計画・予算・人事の協議 研修⑤(ES調査結果をうけて) 	
2021・3	<ul style="list-style-type: none"> 事務局長・事務局次長指名 	<ul style="list-style-type: none"> 中期計画(案)の年度別事業計画(案)の作成 	<p>全体会議</p> <ul style="list-style-type: none"> アンケート結果の共有と今後の方向性 規定の改訂検討 2021年度事業計画 中期計画の共有
2021・4	<ul style="list-style-type: none"> 新人事での事業開始 		
2021・5	<ul style="list-style-type: none"> 理事の段階的交代 新理事の推薦 		
2021・6 ～ 2022・5	<ul style="list-style-type: none"> 理事業務の引継ぎ 事務局業務の継承 		

= コロナ禍の記憶 =



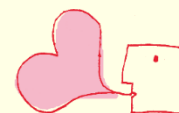
今年3月からこれまでのわずか10ヶ月の間に、新型コロナウイルスによって世界が大きく動いた。経済活動は縮小し、人とモノの流れが止まった。地球環境は良好に変化したと聞いているものの、人の命に関与し、効果的な感染防止対策が見通せない中で、政府の対策やメディアの情報に揺れ動きながら危機管理対策に終始し、不安は増殖している。

感染の不安は、個人の生活の中にまで細々したルールをもたらし、社会全体でそれを守ることを当然視する圧力は日に日に強くなっている。その一方で政府は世界に窓口を開き、経済と感染防止の2兎を負う政策を始めた。

ゆうは、「感染をしない・させないで事業を継続する」を目標に感染予防に取り組んでいるが、暮らしに一番近い生活者の視点で「危険だ!」と感じてもどうにも出来ない無力感にさいなまれる。「人の命」を人質にされると、「自由や自治」が棚上げされることを実感している。

そして第3波が訪れた。これまでの感染予防の日々を振り返り、目まぐるしく変わった社会情勢に戸惑った日常を忘れずに記憶にとどめ、生活者の視点で「危険じゃないかな?」と思った感覚を留めて今後の予防対策に活かしていく必要を感じ、今回の特集を組んだ。

語り部は各事業責任者。コロナ禍の伝承者でもある。



法人事務局

代表：中村 祥子

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

1. 感染しない、感染させない為の予防策。
2. 休まない。利用者の生活維持や動揺を少なくする為に出来る限り、いつも通りのサービスを維持継続する。
3. クラスター源になったときの社会的責任と職員給与の保証を考える。
4. 関係者（職員・利用者・家族等）の協力が不可欠。最低限の申しあわせ事項を依頼しよう。

当初、事業を休むという選択肢は理事会になく、職員からも休みたいという声は出なかった。その頃の新型コロナウイルスの情報は、潜伏期間が2週間程度、他者への感染は症状が現れる2~3日前から、予防ワクチンは開発中、罹患確認の検査は症状が現れて保健所に認められた人のみ、アルコール消毒で殺菌できる、罹患予防は手洗い・マスク・換気・人との距離2メートルという程度だった。確実な予防策が不明な中で目の見えないウイルスとの対峙は不安だらけだったが、サービスを利用している利用者の状況と特性を考慮すると「罹患しないように予防しながら継続する」という選択は、責任や使命感というより“当たり前感”が強かった。

② 感染予防対策の実施内容。

1. 専門家や行政の発信する予防策の徹底。…手洗い・マスク・消毒・換気・密を避ける等
2. 感染予防用品の購入（マスク、消毒剤、ペーパータオル、掃除用具等）、予防対策グッズ（フェイスシールド、面談間仕切り等）の手作りをし、予防に努めた。
3. 事業所・事務機器・送迎車両の消毒。
4. 関係者の情報の共有と行動のための文書発信。…理事会と運営会議で対策を検討し、法人から職員に、法人と各事業所から利用者・家族等に、社会の知見に基づく情報やグループゆいの申し合わせ事項（別記参照）を文書で発信した。
5. 後追いでできる体調管理の実施。
職員：毎日の体調管理記録表（体温、体調、接触の有無等）による体調管理。
利用者：来所時の体調記録（検温、体調等）
来所者：最小限に調整（ボランティア、実習生の受け入れ休止）し、来所者は連絡先、体調調査等の記録を依頼。
6. 事業休止・休業と職員の自宅待機等の実施
 - ・2月に近隣のスーパーで感染者が出て、その店舗に出入りした職員や利用者は2週間自宅待機し、感染の動向を観察した。その際、地域の不特定多数の住民が出入りする自主事業の食堂「キッチン歩歩」と「サロン」も休業した。
 - ・また、職員の家族が通う事業所で感染者が出たため、2週間の事業休止および職員の自宅待機を行って、感染の動向を観察した。
 - ・8月に「地域食堂キッチン歩歩」と「サロン」を閉めた。

□申し合わせ事項の配布（職員4回、利用者家族3回）

- ・手洗い・マスク・消毒・検温・換気・密を避ける等（職員・利用者等）
- ・後追い記録の実施：職員体調記録、来訪者体調記録
- ・不特定者の施設訪問・来訪者（ボランティア・実習生等）の休止
- ・感染者または感染が拡大する地域に住む人との接触後2週間の自宅待機
- ・外国や県外への移動の自粛
- ・観劇、コンサート等のイベント参加の自粛
- ・会議、昼食時の3密回避
- ・マスクをはずす会食会等の参加自粛
- ・罹患したときの対応 等

③ 利用者対応で新たに取り組んだこと。

- ・利用者対応・・・各事業記録参照
- ・既存の支援方法（対面支援）にリモート等の代替支援を追加
対面相談 + 電話による相談
通所支援 + リモート支援の環境整備
- ・利用者家族への感染予防対策への協力のお願いの文の配布

④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。

- ・不安をかかえて相談に来る人や電話が多くなった。動揺や不安を言語化して訴えることができる状況にあることが嬉しかった。また相談しようとする「場」になれたこと、相談を受け取ることができる「人」がいたことも良かったと思った。
- ・同時に法人の事業の維持継続を何としても頑張らないといけないと思った。
- ・各事業の利用者対応は、各事業の記録参照。

⑥ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。

□一方的な支援の形を押し付けていたということの気付き

- ・瞬く間に在宅ワークが社会化される現状を見て、今までの通所ありきの支援の形態が、制度に疑問を感じなかった支援者側の価値観の押し付けだったのではないかと気付かされた。それは“ひきこもり”という一方的な言葉や、外に出ることをよしとする支援の在り方への疑問にもつながった。
- ・今後、対面支援に加えて在宅での支援の質や幅（選択肢）を増やすことが必要。

□「制度では出来ない時がゆうの出番じゃないの？」

- ・会議でウェブ支援について話し合っていた時、受け手の利用者のウェブ環境が整っていない場合の整備をどうするか、というテーマになった。「そこまでは制度でできないので・・・」という意見に「それは行政の模範解答じゃないの？ グループゆうは、その先をどうするのかを考える為にあるんじゃないの？」と言いたかったが切り返せない自分がいた。
- ・制度の枠内の公平なサービスの遵守で良しとするのは行政のミッションであり、グループゆうは自分たちが生活者側（課題を抱えている側・社会的弱者側）に立ち、その課題解決のために、出来る方法を探す。その一番大事にしてきた姿勢を伝えきれていなかったことに気付かされ、反省した。
- ・新聞に、教育格差の是正に取り組む県内のNPOがクラウドファンディングで資金を集め、個々の家庭のリモート環境の整備に着手するという記事が載っていた。制度の限界を支援の限界と捉えていないところに踏ん張りやNPOの可能性が見え、多くのNPOとの交流の必要性もみえた。

□グローバル化と自給率のバランスを保つ必要性…コロナ禍はいずれ終息するだろうが、今後地球規模に拡大する経済活動も変化すると思われる。偏った保護主義は危険だが、現在外国への依存率が高すぎる食糧や感染防止に必要な生活物資（マスク・消毒等）の自給率の向上、またワクチンの国内製造も必須課題であると思う。

□生活者一人ひとりの自立の大切さ

- ・政府は、経済と感染予防の二兎を追って両方の成果を目指している。政府の出す政策だから「お得な旅行や会食に乗らない手はない！」と扇動される前に、社会の動向や情報をもって一人ひとりがその適正を自分で考えて“危機への感性を研ぎ澄ます”ことを怠ってはならないと思った。
- ・グループゆうの事業の方向性は、一人ひとりに添う支援である。その前に一人ひとりをよく知ること、更にその前に、支援者の私たち一人ひとりが情報を集めて自分で考え、判断し、行動することがとても大切だと思う。

⑥ 今後にむけて事業所内、法人全体で取り組んでいきたいこと。

- ・当初からの予防対策を継続、変化する状況に合わせて対策を変化させていく。
- ・衛生物資の計画的調達。
- ・更新型の新型コロナウイルス予防・対応マニュアルと感染症禍のBCP（事業継続計画）の作成。
- ・資本となる資金の調達の是非についての情報収集・検討。
- ・全会員がもう一度ミッションに立ち戻り、今後について自分の意見を伝え合う機会が必要。

⑦ 今後どんな社会変化(一例:格差の拡大等)が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。

□働き方の変化が多様になる

- ・多様な人の多様な働き場（働き方）のコーディネート…自宅で仕事をしたい人、自宅の方が様々なリスクが小さくて仕事がしやすい人、外に出たくない人、子育て中の人、疾病を持つ人等々を対象の仕事場作り。
- ・まずはゆうでリモートワークの実験をし、引きこもりと呼ばれる人を含め、地域に対象を広げていけたらいいと思う。

□セフティーネットが必要になる

- ・格差や個々の多様な課題がひろがり、地域に相談の受け皿が必要になると思う。だれでも、不安な時に人に話を聞いてもらってほっとし、先の見通しを相談できてはじめて次に進むことができると思う。
- ・その人にとっての、“何とか気持ちが収まる場”が「セフティーネット」になるのだとしたら、グループゆうの各事業は、「その入口」になることができると思う。

□エッセンシャルワークへの期待が継続する

- ・政府が休業要請を出しても、その対象にならない業種をエッセンシャルワークといい、福祉事業も含まれていることを今回知った。そのせいか、学校が一斉休業になった時期も、放課後等デイサービスは“留意しながら継続すること”の通知を受け、他の全事業が同様であった。第2波、第3波の中でもエッセンシャルワークの位置付けや特別な感染予防対策は用意されないまま事業が続いている。
- ・今後に向けて、それぞれのエッセンシャルワークの果たした仕事の内容と社会への関与、貢献度、成果と課題等を総括し、これからの社会的位置付けや保障、必要な感染予防対策等の整備を政府に働きかける必要がある。

□NPOの果たす社会的役割の広がり

- ・コロナ禍で今以上に多様な背景を持った課題を抱える人々が増え、社会的課題の解決をミッションとするNPOの役割が広がると思う。しかし個別多様な課題は制度で担えないものが多く、NPOは自主サービスや寄付、民間助成で費用を捻出して取り組んでいる。
- ・国は、新たにコロナ禍セフティーネット事業等(仮称)の創設を行い、人件費や家賃の拠出が可能な事業助成で、受け皿として貢献できるNPOを後押しして欲しい。

□国の財政難から制度事業の対象者や報酬単価の見直しの可能性がある。低下した場合の対策を講ずる必要がある。

⑧ 自由記述

□労務関連で行ったこと（各事業訪問での説明含む）

- ・一部事業の休業や利用自粛があり、事業収入が減少しているが、現在は雇用調整助成金やその他の助成の対象外であるため、銀行融資を受けて、給与の全額を保障する。
- ・しかし、法人事業がクラスター源になった場合は「雇用調整助成金」を申請して給与補填してもらう予定なのでその説明や職員代表の選出を行った。
- ・学校休業の際に、こどもを支援する必要がある職員の勤務について、シフト配慮と給与全額保障を行う。（後日「学校休業等給与助成」を申請した）
- ・「介護・障害福祉慰労金事業」の申請

□地域食堂とサロンの閉鎖

- ・NPOは社会課題解決の為に運動体でもある。『共生社会をすすめる為に地域にノーマライゼーションをどう浸透させるのか』という課題は法人全体のテーマである。各事業はそれぞれの拠点で努力しているが利用者やその家族を対象にすることが多い。「キッチン歩°歩°とサロン」では、一般の市民が自由に出入りできるサービス提供を通して、障がい者や高齢者と“日々の暮らしの中で交流”し、相互理解を進めることを目指した。
- ・その拠点をコロナ禍の7月に閉めた。多くのボランティア貢献と寄付、助成で支援していただき続けてきた集いの場であった。閉鎖の要因は、「集う」事業の中でも最もクラスター源になる可能性の高い事業（皆で集う・だれでも出入り自由・自己決定重視・大きな声で話し笑い歌う・テーブルを囲んで皆で会話をしながら食事をする等等）だったことだ。また、感染終息に1、2年はかかるだろうと考えたとき、その間の家賃等固定費を維持できる財源がなかったことも大きな要因だった。

□新たな挑戦のはじまり

- ・ウイルスに翻弄され続けたこの間、世界中の人々のコロナ禍のくらしがニュースで放映された。それを見聞きすると文化や思考・価値観は多種多様で、これまでの自分の価値観や基準が全てではないことを思い知った。
- ・これからのグループゆうは、差別のない社会づくりを目指すミッションに変わりはないが、その推進には、新たな価値観を加味して変革していかなければならないのだと思った。
- ・おりしもグループゆうは今年、創成期から変革期にむけて新たに歩み始めようとしていた。だから今、私たちにめげている時間はない。新たな挑戦のはじまりの年にしよう！

高齢者ホームヘルプサービス・障がい児者居宅介護 管理者：高橋路代・運営委員：澤里森子

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

ヘルパー自身が感染しない、感染源にならない為に感染予防の徹底。高齢者・障がい者の一人暮らしが多く、サービスの継続のために様々な面に配慮が必要となった。

② 感染予防対策の実施内容
<p>訪問するヘルパーの体調確認。（毎日検温・チェックシート）3密を避ける声かけ。</p> <p>利用者の体温・体調確認。訪問先の生活状況確認・換気。衛生用品（マスク・ディスポ手袋・消毒液）の確保、ヘルパーへの配布。</p>
③ 利用者対応で新たに取組んだこと。
<p>法人より、感染予防についてのお便り配布。検温のお願い。県外（特に感染者が多い所）からのご家族等の出入りがあった場合、その状況に応じ利用を控えて頂く事。</p>
④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。
<p>ヘルパーの出入りに不安を感じての利用控え、家族の出入りも一時的になくなり、そのような時はTEL をしての状況の確認や、訪問時も玄関先で短時間の会話。</p> <p>利用者の不安をお聞きする事・予防対策のアドバイスをする。利用者によっては、コロナの話題ばかりを取り上げない配慮等。</p>
⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。
<p>サービスを利用されていても、コロナ禍で“出来る事は自分で行う”事を実践された利用者もありました。又、今後の生活の変化や見直し等、今までとは違った生活も視野に入れ、かいかねなければなりません。支援者としても別の観点も必要になるとおもわれます。</p>
⑥ 今後むけて事業所内、法人全体で取組んでいきたいこと。
<p>様々な感染についての知識や新しい情報を取り入れて予防に努める。</p> <p>今後更なる感染予防対策の為、衛生用品等の物品の確保をしておくこと、スタッフ・ヘルパーのクリーンアップを心がける。</p>
⑦ 今後どんな社会変化（一例：格差の拡大等）が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族間の行き来も頻繁にできない状況下で、在宅で暮らす利用者にとって、専門職のヘルパーが行う支援とこれまで家族が担っていた買い物や掃除等の日常生活を支えるサービスを含む、トータルサポートが求められており、「制度事業」（介護保険・日常生活支援事業）と法人の強みである「助け合い」をつないでの支援が、これまで以上に期待されると考える。 ・ また、地域で暮らす多様な人・家族への支援を保健師さんが仲介するケースも出てきて、支援者の幅広いスキルをもって、支援に当たる必要が高まっている。 ・ トータルな支援のカギは、人材の確保と育成にあると思われる。
⑧ 自由記述
<p>コロナ禍で、最も三密を防ぐことが難しい「サロン」を閉めました。</p> <p>2000 年から実施し、地域に受け入れられ、町内会や包括との連携も深まり、地域の自然体の集いの場になって、子ども食堂にもなっていました。しかし、感染予防対策の真逆の環境にある活動であったことから、開き続けることをあきらめざるを得ませんでした。多くの皆さまのご支援で継続できた「集いの場」でした。本当にありがとうございました。</p>

トータルサポートセンターゆう

運営委員：佐藤こず枝

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

様々なライフステージの方々や各支援事業所との連携をとっているため、自らが感染源になり感染を広げないように考えた。そのため、対面での面談、モニタリング、アセスメントを中止とし電話での対応を切り替えた。

② 感染予防対策の実施内容。

定期的な手洗い、消毒。毎朝検温と体調チェックの実施。
適時、換気と消毒の実施。

③ 利用者対応で新たに取組んだこと。

対面の際には、検温や体調管理表の記入の実施を依頼する。

④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。

電話相談や必要に応じて、通所先・通園先などと情報を共有し対応を依頼する。

⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。

医療業界に比べ福祉業界は感染予防の実施内容に関して各事業所の判断に任せられているところがあり、どこまで実施するか（担当者会議を実施して良い状況なのかなど）の判断に苦慮する場面もあった。

⑥ 今後に向けて事業所内、法人全体で取組んでいきたいこと。

- ・感染しない。感染させない。対策の継続。
- ・今後、同じような事態もしくはより悪化した事態に備えてリモート会議などを実施できる体制作り。

⑦ 今後どんな社会変化（一例：格差の拡大等）が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。

- ・今年度はコロナの影響で休校措置や行事の中止が相次ぎ、社会体験を経験する機会も増やすことが出来ない状況が学校や放課後等デイサービスを始めた事業所で現在も継続している。
- ・生活スキルやコミュニケーションスキルの成長にも影響するであろう。
- ・モニタリングにて状況の分析を行い必要なサービスに繋げていきたい。

ピーターパンふくおか

運営委員：浅野 弘絵

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

臨時休校への対応

② 感染予防対策の実施内容。

職員・利用者・来訪者の検温／手指消毒／マスクの着用
室内及び車両の清掃・消毒
集団活動やイベントの中止

③ 利用者対応で新たに取り組んだこと。

1. 放課後等デイサービスの代替サービスの実施

例)・電話にて利用者や家族の現状把握や相談支援を実施している。

- ・LINE のビデオ通話で利用者の得意な楽器演奏やゲーム、工作等を披露してもらい、スタッフから褒められることで本人が満足感を得られるような支援を提供している。
- ・ビデオ通話で利用者の好きな調理活動を取り入れ、簡単なレシピをスタッフの手順を見ながら同じように調理していくことで達成感を得ることと、将来的にレシピ動画を見ながら自分で調理ができるようになることを見据えた支援を提供している。

2. 臨時休校や分散登校に関して光明支援学校との話し合い

- (参加者) ○宮城県立光明支援学校 校長 田野崎氏/教頭 大山氏/特別支援教育コーディネーター 勝又氏
 ○宮城県立小松島支援学校 校長 鳩原氏
 ○満天の星 ぼらりす 熊谷氏
 ○彩 るびなす 庄子氏
 ○グループゆう ピーターパンふくおか 浅野

3. 放課後ケアネットワーク仙台として教育委員会への働きかけと要望書の提出

- (要望書提出時の出席者) ○宮城県教育庁特別支援教育課 課長 川村氏/庁副参事兼課長補佐 山崎氏
 ○放課後ケアネットワーク仙台 代表 熊谷氏/執行部員 浅野
 ○河北新報社 記者 横川氏

2020年 6月 吉日

宮城県教育委員会
 教育長 殿

放課後ケアネットワーク仙台
 代表 熊谷 秀典

新型コロナウイルス感染症に伴う支援学校の対応について緊急要望書

このたび、新型コロナウイルス感染症対策として、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校等における一斉臨時休業を要請する方針が2月27日に内閣総理大臣から、2月28日に文部科学省から出されました。

一方、継続することを前提とされている社会福祉事業の一つである放課後等デイサービス事業は、最大限の感染予防を行いながら事業を継続しています。この間、子どもたちの一日の生活で、家での生活に次ぐ長時間の学習の場を保障する学校が休校になったことによる、子どもたちへの影響を日々感じてまいりました。そこで、コロナ禍であっても子どもたちのより良い成長を育む環境整備の為に、連携を深めたいと考え、今回の要望に至りました。

・まず、学校の臨時休業が長期化したことにより、子ども達の生活リズムや学びに、これまでにない影響を与えています。

障害のある子どもたちは、特に活動の場が家庭か放課後等デイサービス事業所に限定されており、本来なら毎日の登校があってこそ確立できる生活のリズムが大きく崩れてしまう子ども達が出ております。生活リズムは、子ども達の情緒の安定や各種学習に必要な集中力になくしてはならないものとされ、家庭での生活だけで保ち続けることは課題が多く、また一度崩れた生活リズムを戻すことはとても時間を必要とします。

長期間の臨時休校は、そんな子ども達の健全な成長を大きく阻害する要因となっていると危惧しておりますので、6月からの学校再開を聞き、安堵しているところですが、より早く子ども達が普段どおりの生活を取り戻せるよう、県立支援学校および管轄する宮城県教育庁に以下のことを緊急的に要望するところで。

●緊急に対応していただきたい事項

1. 通常の学校再開への早期移行・・・県立の支援学校におきましては、仙台市の小学校・中学校・特別支援学校同様なるべく早い段階で分散登校から通常通りの登校に移行を進めていただきたくお願い致します。

仙台市の小学校・中学校・特別支援学校は6月からの学校再開から毎日の登校となっております。その一方で、仙台市近郊の県立支援学校のほとんどは分散登校の判断をし、それを夏季休暇期間まで行おうとしております。また、夏季休暇期間も仙台市立よりも長い設定をしています。

分散登校を行えばそれだけ生徒一人ひとりの授業日数が短くなり、本来その年齢に学ぶべきものが疎かになってしまいます。なお、感染リスクを軽減するために長期間分散登校をせざるを得ない状況が県立支援学校にある場合、夏季休暇および秋季休暇期間を生徒のために登校日とし、学校で学ぶべきことに漏れないようなご配慮をお願い致します。

2. 分散登校において、例外的に毎日の登校を受け入れて下さる事例もあり、受け入れの条件等が不明確な中、子どもや家族が見通しを立てて生活を送り難い状況にあります。納得ある受入れ条件を共有するとともに、公開できない事情を抱える家族等への特別な支援を行い、子どもや家族が生活の基盤を確立できるよう、全てのご家族に公平に情報が行き届き、希望者の受け入れを可能にする体制整備をお願い致します。

先の緊急事態宣言の全面解除を受け、宮城県内も自粛解除になり普段どおりの生活に戻りつつあります。それは、今まで特例として在宅勤務や特別休暇と工夫しご自宅で子どもたちのことを見守っていた保護者もこれまでどおりに働かなければならなくなります。分散登校での自宅学習の日だけ休むわけにも行かず子どもたちの預け先に苦慮しています。また「自宅学習の日は放課後等デイサービスへ預けてください」という学校側から保護者への提案もあるようですが、登校する児童と分散登校で自宅学習の児童それぞれに対応するには、個々対応の受け入れ態勢の整備や煩雑な送迎対応が求められ、3月の学校の臨時休業に対応してきた放課後等デイサービス事業所にとっては、運営面においても人的な面においてもギリギリな状況で踏ん張っている現状にあります。

なお、毎日登校の生活リズムが定着している子ども達の中には、突然の3日に1回程度の分散登校に対応できず、生活リズムの崩れをより一層増長するお子さんもいます。それらを回避するためには、臨時休業期間であっても、一人ひとりに配慮した生活リズム獲得の配慮をお願いします。

さらに、県教育委員会におかれましては、学校ごと・対応する先生ごとに受け入れ頻度や条件に誤差が生じないように、適正な基準を設け各学校に指示を出して頂きます様、お願い致します。

3. 分散登校中の自宅学習日には、学校から児童への教育対応をお願いします。

今回の臨時休業に伴い、児童が学んだ経験するべき授業が受けられない状況です。特に高校3年生にとっては卒業後の進路に向けて取り組むべきだった作業学習や作業実習ができずにいます。そこにて、分散登校にすることでさらに先延ばしになる可能性が出てきています。学期期にとっては、1年1年が大人になるために必要な時期になります。このままでは、一年の多くを無にすることになってしまいます。そこで、臨時休業期間であっても、対面ではない方法での学びの保障をお願いします。

学期期にとっての学びの場は学校が最も頼りとされている場です。子どもや家族は不安の中で在宅生活を余儀なくされていますので、インターネットや教材をコピーしたプリントを渡すことに加え、障害の程度にかかわらず、適切な課題の提供や遠隔支援の実施をお願いします。

4. 分散登校の決定等も含め、学校での子どもに係る大切な決定を行う際、家族等との関係者や関係機関(地域の学校以外の子どもの受け皿)と情報の共有や話し合いの機会を持ってください。

●今後の第二波に備え、準備していただきたい事項

1. 子ども達の学びの保障を継続してください・・・今回の様に、国の休校要請があった場合にも、宮城県においては学校が学童の学びを保障継続するよう体制整備をお願いします。また、次の緊急事態での障害のある子どもの穏やかな生活を保障する為には、学校だけで背負うのではなく、子どもを支える関係機関の連携が不可欠であり効果的であると考えます。

2. 学校と家庭の連携を継続してください・・・学校は教育だけでなく、子どもを通じて家庭の様子を知ることのできる要の場所と考えます。今回のコロナ禍で子どもも親も不安に過ごしていた時期だからこそ、子どもの健康確認や生活のことについて相談できる場所の一つとして体制整備をお願いします。

3. 家族介護からの社会化の継続をおねがいします・・・休校による感染症拡大予防の効果の検証はこれからですが、家族支援に頼った状況は、家族の過大な負担の上に成り立っていると考えます。たとえ在宅が唯一の選択肢になっても、長年の社会福祉政策への提言で積み重ねてきた、介護の社会化や障害児の学びの保障をあきらめることは出来ません。子どもを真ん中において、学校に加えて地域の関係機関が連携し、家族だけに負担をかけない、学びを継続できる在宅生活のあり方を検討していく機会にしたいとさせていただきます、お願いします。

2. 休校期間や学校再開について判断する場合には、必ず家族や関係機関また仙台市教育委員会と協議したうえで一貫性のある方針を打ち立てていただきたくお願いします。

以上

※要望書の写しが必要な方は事務局までご連絡ください。

④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。
<p>長期的な臨時休校や分散登校、毎日登校の再開による混乱や不安 外出機会やイベントがなくなったことによるストレス 学校や事業所での新しい生活様式による混乱 進級や新学期になったことを知らせる機会が失われたことによる混乱や不安 →YouTube でコロナや衛生管理についての学習を取り入れた →利用者の状態によって個別に対応した</p>
⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団活動の在り方 ・ 毎日登校や日々の生活習慣が急に変わってしまうことに対する利用者への伝え方や見通しの持たせ方
⑥ 今後に向けて事業所内、法人全体で取り組んでいきたいこと。
<p>代替サービスの継続と遠隔支援の充実（効果的かつ魅力的な内容の検討）</p>
⑦ 今後どんな社会変化（一例：格差の拡大等）が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はど う関わることができそうか。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 働き方やサービス提供方法の多様化 <p>→事業所への来所だけではないサービス提供（個別訪問や遠隔支援） →時差出勤やリモート会議など多様な働き方や法人への関わり方の提案</p>

ピーターパン長命ヶ丘

管理者：有路耐子・運営委員：菅野佳奈美

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 手洗い、うがい、三密を避ける等の自己管理の徹底。 ・ 利用者、スタッフ同士の体調確認。 ・ 自分が感染源にならないように気を付けて行動する。
② 感染予防対策の実施内容。
<ul style="list-style-type: none"> ・ スタッフのマスクの装着、検温、手洗い。 ・ 室内の消毒、定期的な換気、送迎車の消毒。 ・ 利用者は来所時に手洗い・検温・手指の消毒。可能な子はマスクの装着を促す（放課後デイ） ・ おやつ時間は一人分のスペースを空けて座る（放課後デイ） ・ 来客時の体調確認・検温・消手指の消毒等。
③ 利用者対応で新たに取り組んだこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ②と重複しますが、来所後手洗い、検温、三密を避けての活動。 ・ 学校休校時の利用者の受け入れ（家族の希望に応じて）
④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。
<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ感染に不安があり、休む利用者が数名いた。 ・ 電話で家族に様子を伺ったり、ご家庭での過ごし方の相談に乗った。 ・ オンライン対応を検討したが、実施までには至らなかった。
⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。

- ・体調確認、自己管理の大切さ。感染防止をしっかりとすることで、コロナを恐れることなく活動できる。
- ・リモートの活用方法。
- ・マスクを装着しての支援は、顔が隠れることから、表情や言葉と顔の表情が一連となって伝わる動作（「もぐもぐ」と言いながら、口を動かすしぐさ）等が伝わりづらさがある。フェイスシールド検討中。
- ・コロナ禍の外出自粛で、親のストレスが溜り、そのストレスが弱い人（子ども）に向かうケースが出てきている社会的現象をどうにかできないものかと思った。
- ・コロナ以前の普通の日常生活が素晴らしいものだった、ということに気付いた。

⑥ 今後に向けて事業所内、法人全体で取り組んでいきたいこと。

オンラインを使った支援や会議。

⑦ 今後どんな社会変化（一例：格差の拡大等）が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。

- ・情報格差が出る、孤立する可能性がある・・・情報伝達に努め、相談にのる。
→正しい情報を伝え、相談に乗る。必要であれば行政や支援機関、相談支援につなげる。
- ・一人親家庭への負担が増える・・・出来る限り受け入れ対応する。
→学校や施設等で子どもの体調管理がこれまでよりも厳しくなる為、子どもの自宅待機が増え、親が仕事を休まなければならないことが増えるのではないか。そのとき、他の利用者の安全が確保できるのであれば、可能な限り対応する。

⑧ 自由記述

- ・働き方の変化で、東京一極集中ではなく地方への移住を考える人が増えていることは嬉しい。地方でも移り住んだ人が暮らし易いサービスを提供出来たらと思う。
- ・コロナで自粛期間中、温室効果ガスが減り、空気が少しキレイになった！ コロナ禍の人の行動自粛は、地球環境に良い効果をもたらしたようです。o^-^o

児童発達支援センター仙台市サンホーム

園長・運営委員：菅野淑江、児発管・運営委員：赤間ひろみ、成瀬理沙

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

- ・緊急事態宣言時は、子どもや家族、職員を感染させないこと。感染拡大している泉区内で、感染抵抗力も脆弱で重症化しやすい幼児の生命の安全を優先すべきと考えた。多くの家庭が登園自粛し、それを尊重した。基本的ニーズとして、生命の安全、次に生活や療育の保障があると考えた。
- ・次の段階として、長引く自粛生活下においては、ストレスフルな親子について電話によりタイムリーに生活や遊びの支援と不安の軽減を心掛けた。
- ・社会の感染動向の変化、個々の感染リスクの考え方の温度差、情報入手と判断力の相違などから、我が子や家族の命を守るための的確な情報や行動についての啓発・教育等（リスクコミュニケーションの視点）も重要であると考えた。

② 感染予防対策の実施内容。

- ・療育場面の三密を避ける行動や環境の整備：検温、マスク着用、正しい手洗い励行。療育前後の保育室内、玩具、テーブルなどの家具の清掃と消毒。6月中旬まではクラスを2分割し、別部屋での療育、昼食なしの時短療育を実施。昼食開始後はアクリル板の設置。水分補給も各家庭から持参。

- ・研修や勉強会時の感染予防：透明カーテンで仕切り設置と座席スペースの確保、30分おきの換気。情報交換等の会話を除いた企画内容への変更など。
- ・来客者の検温と万が一のときに追跡可能な記録の整備。

③ 利用者対応で新たに取り組んだこと。

- ・療育現場では、親子やスタッフとの身体的接触は避けられないが、バス等の送迎時などのシートベルト着脱などは極力保護者に依頼。利用者の使用する玩具の消毒のほか、プール遊びを控えるなど遊びメニュー変更や三密が予想される行事の変更。

④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。

- ・泉区での感染拡大があり、緊急事態宣言下には、日々感染不安の訴えが多く、登園自粛希望が立て続いた。4月中旬以降、1日1~3組の家族の登園であったため、5月上旬まで自由登園形式で対応した。登園自粛の家族については、自宅での過ごし方の聴取や遊びの提案、教材の送付などを実施した。また、家庭で過ごしきれないご家庭については、登園を促し対応した。

⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。

- ・これまでやってきた療育は、直接子どもと触れ合い、子どもの表情、視線、何気ないしぐさ、わずかな発声も見逃さず、コミュニケーションにつなげていくことを大切にしていたのだと改めて気づかされた。また、保護者のかかわりも同様にちょっとした表情や雰囲気の違いから悩みなどを察知することもあったので登園自粛が進み、直接会えないことでもどかしさがあった。

⑥ 今後に向けて事業所内、法人全体で取り組んでいきたいこと。

- ・今後の感染動向の変化を視野に入れ、ここ数年は感染予防対策やマスクや手洗いなどの厳重な予防行動の継続が求められる。当初より感染対策の根拠も明らかになり、効果的・効率的な対応の選択が可能になってきた。安全な方法を考慮したうえで、児童発達支援センターが果たす役割について前向きに検討していくことが望まれる。
- ・今後再び、このような事態が訪れることも考えられるため、新たな療育の枠組みも検討していけると良い。（小集団ではなく個別的な療育、リモートでの見せる療育など）

⑦ 今後どんな社会変化(一例:格差の拡大等)が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。

- ・マスク等公表の影響もあり、個人や組織の責任が問われたり、マスク着用しないだけで白い目で見られたり、怒鳴られたりするなど過剰な攻撃的反応を受けることもある。感染の恐怖のあまり対人面の寛容度も低下しつつあり、残念ながら差別化される社会現象が生じている面もある。（誰もが感染する可能性が大きく、他人ごとではないはずなのに）今こそ感染者やその家族、職場が差別されない風土づくりと感染者の安心できる社会復帰が求められる。事業所全体がそのような風土を積極的に醸成していく必要がある。

⑧ 自由記述

- ・いつ生命の危機が訪れるかわからない社会になり、今の幸せや家族が触れ合える大切さをかみしめる時代になった。また、在宅ワーク等仕事の在り方も変化して、家族との過ごしや家族の関係性の変化もうかがえる。家族と過ごす時間や外出にこだわらない育児の楽しみ方など、新しい家族の生活が展開されつつある。

一方で、訪問が少なくなった高齢者などの運動・交流不足による合併症の悪化、二次障害や孤立が問題視されている。子育て世代も元々交流が苦手な保護者についてはひきこもり子育てが増長されてしまいがちである。人とのつながり（孤立予防）を再構築するような取り組みが一層重要になっている。コロナで物理的なスペースをとった分、こころはより近く温かいものでありたいものです。

ワークスペース歩°歩°

サービス管理責任者・運営委員：高橋 辰徳

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

- ・感染予防対策をしっかり行い、安心して通所して頂ける環境づくり
- ・ご利用者様が過度に不安にならないよう正確な情報収集

② 感染予防対策の実施内容。

- ・入室時の手指の消毒
- ・毎日の室内の消毒
- ・作業ごとに小集団での活動に変更
- ・余暇活動、作業後のフリータイムの中止

③ 利用者対応で新たに取り組んだこと。

- ・在宅支援
電話での体調確認、プリントを使用したプログラムや販売時に使用する袋のスタンプ押し等の生産活動に関わる作業の提供。

④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。

- ・イベントの中止や活動の制限等でストレスを感じている方、新型コロナウイルスの終息は見通しが持たず、いつまで現在の状況が続くのか不安を感じている方もおられ、報道等から過度に不安を感じないように、その都度今できる事をお伝えしている。
- ・一人でご自宅で過ごされる時間も増えた事で、パソコンを活用しながら「一人で過ごす」練習の素材を提供し、実施することが出来た。
- ・販売や、余暇活動等中止になった事、少人数での活動に切り替えたことで関わる人が少なくなり、作業も同じ作業の繰り返しになり、“作業意欲の継続”が難しい場合もあった。作業や環境に変化を取り入れ、意欲の啓発に取り組んでいる。

⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。

- ・在宅でのプログラムや作業の実施の可能性を感じたと同時に、既存の設備だけでは通常よりも労力と時間がかかる為、今後適切な設備の整備が必要だと分かった。
- ・今回のように日本全体の経済に影響が広がると、現在行っている事業（就労支援、就労後支援、商品の生産、販売）にも影響を受ける為、情報収集と迅速な対応が必要だと感じた。
- ・なかなか人に会えなくなったが、電話やメールでいただいた連絡でもありがたさを感じ、人とのつながりの大切さを改めて実感した。
- ・商品の販売方法や、在宅でのプログラム（ご自宅での過ごし方も含む）もニーズに合わせて工夫していかないといけないと感じた。
- ・地域ネットワーク「あがいん」から“福の市”への参加を呼び掛けていただき、各作業所が商品を持ち寄って三密を回避しながら、外での販売会を地元で開催した。協働のありがたさと心強さを身に染みて体感し、加えて打たれ強さを学んだ。

⑥ 今後にむけて事業所内、法人全体で取り組んでいきたいこと。

事業所：販売やプログラムに「ネット」をもっと活用できるように仕組みを学んでいきたい。

法人：各事業所単位では、今回のような見通しが全く持てない事が起きた場合に、状況に合わせて迅速に対応できるように、情報収集した内容、今回で言うと新型コロナウイルス拡大防止策等を、法人全体でスムーズに情報共有できる仕組み作りが必要だと感じた。

（現在は、紙媒体で職員やご家族への依頼文や情報提供を行っている）

⑦ 今後どんな社会変化(一例:格差の拡大等)が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。

- ・実際に人と合わなくても会議が出来たり、ネットでの買い物や支払いが出来たり、荷物を受け取れたり等の新しい生活様式に馴染める方もいれば、人とのつながり、関りが減っていき、馴染めない方も出てくる事が懸念されます。またそれによって、今までなかった新しい困り事も増えてくるのではないかと思います。
- ・現在、企業においても事業の継続が難しくなっている中で、企業努力で行われてきた少数者のニーズへのサービスはどんどん削られて、多数者のニーズに向けられたサービスが主になってくるのではないかと思います。
- ・人との繋がり、関りが減り、困り事、少数のニーズが社会の流れに埋もれてしまわないように、しっかり拾い上げ、発信していく、つなげていく、グループゆうが今まで行おうとしてきた事を変わずに継続していく事が必要になるのではないかと思います。

ほっとスペース歩°歩°

施設長・運営委員：佐藤 裕信

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

緊急の面談を除き、定期的な面談を休止し、電話対応に切り替える。
プログラム等は、自立訓練などと対応を協議し、連携する
心理的な不安を招くことが想定されるので、家族支援も含め、電話相談に力を入れる
就労している方の状況変化、事業所の状況等の把握に努める
通院同席など、医療機関の状況把握に努める など

② 感染予防対策の実施内容。

プログラム参加者に検温、体調管理の記入を必ず行ってもらう

③ 利用者対応で新たに取り組んだこと。

緊急時の相談の際は、ご本人・保護者の方の検温、体調管理の記入を行ってもらう

④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。

- ・電話対応だけでは難しく、必要に応じて、面談を取り、不安感や焦燥感を吐き出してもらう。この不安感の中には、休日の余暇の過ごし方として、イベント見学、図書館等の施設利用をルーチン化している方には、特に不満や不安が強く、思いのたけを全部吐き出してもらえよう、面談の流れを作り、不満等を開示してもらう。とともに、内面の辛さを吐き出すことで、現在の状況を、何とか受け入れる心の「隙間」を作ってもらようよう、丁寧な関りを行う。
- ・また、そもそも家族関係に課題がある上に、父親のオンラインでの在宅勤務という環境変化も、不安定になる要因として挙げられた。家族理解の課題が顕在化したと言える。改めて、家族支援の重要性を考える機会となった。
- ・公共交通機関を利用して、事業所に通っているご家族の中には、当然ながら、バス・地下鉄での過密が気になり、利用を一旦中止した方もいて、ご家族の不安の軽減を待つ姿勢をとった。それだけ、ご本人への思いが深く強いという、家族の思いを、感じる良い機会となったとも言える。ご本人は、

歩° 歩° に行きたいという思いを、否定されたという感じが、当初はあったが、家族の優しさを知る契機になった方もいた。

- ・就労先は、概ね、休業補償を行い、就業時間を短縮したり、就業日数を減らして対応しており、幸い、給与面での課題は生まれなかった。しかし、業種によっては、先行きの不安を、ご本人、ご家族が強く持ち、一緒に転職先を探し、転職ができたケースもあった。
- ・それぞれのご家族が、『在宅』という環境の中で、改めて、見つめ直す良い機会となったご家庭もあった。コロナへの不安や心配を、ご本人・ご家族が共有することで、それぞれの感じ方や振る舞いを、互いに受容することに繋がったケースもあり、災いを奇禍として、互いの思いが深まる姿を、共に見ることができて、嬉しく感じた。
- ・夫の『在宅』によって、それまで目につかなかった、ご夫婦の溝が表面化したという、マスコミ報道もあったが、相談を受けているご家族からは、そのような印象を受けなかった。普段から、子どもへの理解の仕方や関り方など、相互の違いに目を向けて、思いやっているご夫婦にとっては、却って、腰を据えて考え直す良い機会であったのであろうか、それとも、普段からそれぞれの違いに気づいているご夫婦にとっては、取り立てて、課題になるほどのことではなかったのであろうか、大きく家族関係が崩れるケースを見ることはなかった。

⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。

- ・TVやネットなど、コロナ関連のニュースを、見ないように工夫ができた方もいるが、どうしても目や耳に情報が飛び込み、混乱を招いてしまった方もいた。ASDの特性の方は、これまでの社会体験で、理解が得られず、「上手くいかないのではないか」という不安を持っているが、コロナの状況が、更に、この不安を悪化させてしまった。
- ・これまでも、様々な事件報道で、混乱を招かざるを得なかったが、コロナは、報道が長く続いているため、現在も相談支援をしながら、支えている方もいる。「不安」と、どのように向き合うのか、なかなか答えは、出せていない。
- ・TVやネットなど、コロナ関連のニュースを、見ないように工夫ができた方もいるが、どうしても目や耳に情報が飛び込み、混乱を招いてしまった方もいた。ASDの特性の方は、これまでの社会体験で、理解が得られず、「上手くいかないのではないか」という不安を持っているが、コロナの状況が、更に、この不安を悪化させてしまった。
- ・これまでも、様々な事件報道で、混乱を招かざるを得なかったが、コロナは、報道が長く続いているため、現在も相談支援をしながら、支えている方もいる。「不安」と、どのように向き合うのか、なかなか答えは、出せていない。

⑥ 今後に向けて事業所内、法人全体で取り組んでいきたいこと。

- ・相談支援をしている方の中には、頼りにしている歩° 歩° が、コロナの影響で、事業ができなくなるのでは、といった不安を抱えて、訴える方もいた。「歩° 歩° は、大丈夫ですか？」と、自分のことでさえ大変なのに、私たちが心配している声を聞くと心に滲みるものがあります。
- ・事業閉鎖などの事態に追い込まれないように、心しないといけないと、改めて思います。
- ・感染対策のみならず、事業継続、発展のために、社会の状況変化に応じた対策を講じていかないと、と思いますが、感染対策以外、どのような心構えで、乗りきったら良いのか、暗中模索の状態です。

⑦ 今後どんな社会変化(一例:格差の拡大等)が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。

- ・就労されている方の事業所でのコロナの影響は、様々で、土産物などを扱っている会社で、商品製造や箱詰めなど行っている方、外食産業の調理補助や食器洗浄などを担っている方や、カラオケ店などの清掃を担っている方、ホテルなどに届ける野菜を作っている方は、大きな打撃を受けています。徐々に回復しつつあるとはいえ、まだまだ、予断は出来ません。一方で、家庭での食事をする機会が増えて、スーパーなどに商品を納める、流通関係の仕事で仕分けを行っている方は、非常に忙しくなっています。
- ・普段の、食料品や日用品の店舗販売は、ある程度確保されるでしょうが、他は、ネット通販などに押され、店舗販売は少なくなっていくのではないのでしょうか？小売店でのバックヤードの仕事から、ネット通販などの流通関係での仕分けや発送などに、シフトしていくのではないかと思います。就労面で、どの作業の切り出しが、ご本人の特性に合っているのか、社会情勢を見ながら、しっかりと開拓する目が必要です。
- ・また、店舗販売の際も、対人ではなく、ロボットが担うことも出てくるかもしれません。直接、人と話しながら、接客を行うのではなく、遠隔操作のロボットが接客する試みもなされています。ALSの方が、遠方において、声だけで接客している場面をTVで見ました。その方は、販売会社と、時短の雇用契約が成立しました。障がいを持っている方の、新たな社会参加の可能性を感じます。既成概念にとらわれず、新たな社会参加の可能性を探る、柔軟な発想も必要です。
- ・オンラインなど、直接の対面ではなく、PCを通した話し合いも、一般的になるのでしょうか。相談場面も、変わるかもしれません。自室や家庭に「引きこもっている」方の、相談支援の方法として、オンラインは、ひとつの方法になるかもしれません。対人不安（面談場所まで来る時の、公共交通機関の中で、人の視線が気になる対人緊張や、着替えや整容面などを整える、人に見られることへのこだわりや防衛機制的な高い方など）が背景にあり、直接の面談に来られない方には、オンラインは、人と話す機会になるかもしれません。当然、面談スキルが高く求められますが、ひとつのきっかけにはなるかもしれません。オンラインでの会話内容が、逐次的に記録されることも可能になるでしょう（当然、沈黙の時間も大切なので、記録してほしいですが）。選んだ言葉使いやレスポンスなど、支援者の側の反応も、後からきちんと検証できることも、期待したいと思います。保護者面談などの面談スキルの検証・検討を、皆さんで行い、全体的なレベルアップも図れたらと、期待してしまいます。
- ・一方で、オンラインは、2者間のコミュニケーションの様々な状況に対応できるかも知れませんが、コミュニケーションは、もっと複雑なのが、普通です。AさんとBさんが話している時の、Cさんの表情や会話への入り方など、それぞれの関係性のベクトルが、複雑に絡み合って、コミュニケーションは成り立っています。グループワークでは、この場面を意図的に設定しながら、人の考えや気持ちに、自分の気持ちを向けたり、人の動きを模倣・学習したり、違いに気づいたりといったことを学んでいます。このような集団場面での機会を、なかなか持てないことが、大きな悩みでもあります。
- ・ASDの方のコミュニケーション支援は、言葉だけを使ったものではありません。道具（ボールや棒など）を使って、人の動きを感じる、人の動きに合わせる（調整する）、人と一緒に課題を達成するといった、狙いをもったプログラムで、その人なりの発達・成長を促すことも大切です。人と共に、心地よく、楽しく、それぞれ助け合い、互いを認め合う『場』が、とても大切です。今後、この『場』をどのように、作っていくのか、大きな課題です。
- ・法人の、これまでの社会的な使命も、困っている人、悩んでいる人が、地域で集まり、互いに支え合いながら、サービスを作ったり、制度を作ったりという、共生社会の創造の熱意が源にあります。「ひと」との出会いを大切にしてきましたが、その『出会い方』と、「ひと」との出会いで生まれた、社会を造るという「熱量」を、どのような形にしていくのか、悩ましい問題です。これまでの既存の「運動体」として「ありよう」だけでは、難しいのでしょうか。むしろ、この問題に向き合う「楽しさ」を感じられる、新しい世代の感性に期待したいと思います。

キッチン歩°歩°

管理者：門馬 美代子

① 新型コロナウイルス禍でまずやるべきことは何であると考えたか。

キッチン歩°歩°が、感染源にならないことを最重要と考えた。4/6 に近隣のスーパーで感染者が出た時、翌日から店舗の営業と泉病院の販売を2週間の休業とし、4/16 宮城県に緊急事態宣言が出てからは5/6 までの休業を決定した。

② 感染予防対策の実施内容。

配食サービス開始以来からの感染症予防策としてのマスク着用、手洗い、調理場、調理器具の清掃・消毒の徹底に加え、職員の健康管理（健康チェックシートの毎日の記入）、衛生的な身支度。手荷物・配達品の受け取りは外で、外箱から出し厨房内に入れ、サインは外とする、手をアルコールで消毒してから、冷蔵庫 or 冷凍庫に収納する等の細菌を厨房内に入れないことを徹底した。

③ 利用者対応で新たに取組んだこと。

5/7 の再開時は店内の営業は全て辞め、ショーケースとレジの配置を換え、入口とレジ上の開口部をビニールカーテンで仕切り飛沫感染を防いだ。食事は全てテイクアウトにし販売品のみ扱うことにした。夜間のレストランの貸出、サロンでの体操教室、麻雀、土曜日の子ども食堂、併設の将棋教室、英語教室も全て休止。入口にアルコールを常備し、全員の消毒の徹底を図った。

④ 利用者の動揺や生活変化、またそれに対する対応について。

店内入場禁止にしたが、高齢者で病院の薬待ちや、足の具合や気分が悪くなり休ませてあげた人など、徹底はなかなか難しい場面があった。外出制限になってからは、子供の為の弁当、総菜の利用、高齢の親への食事の用意等、弁当販売は増加。タイ焼き、たこ焼きの売り上げも以前より増えた。委託契約が取れて、順調に売り上げを伸ばしていて、お馴染みのお客も増えていた泉病院の出張販売はコロナ後には通院控えも有って少し減少した。

⑤ コロナ禍から学んだこと、気付かされたこと。

チェックシートの記入による、普段の自分の体調の把握、管理の大切さを再認識した。病原菌に関しては人間が無力であり、悔ることなく、出来る限りの防衛策を取ること。

マスクごしの会話は表情、顔色がわかりづらくコミュニケーションが取りづらい。

顔を見ての人とのコミュニケーションが全ての場面でいかに大事か改めて感じた。

メールやラインの便利さを再認識した。

⑥ 今後むけて事業所内、法人全体で取組んでいきたいこと。

会議の時間の短縮、事前の情報伝達のシステム化、事務のリモート化、清潔な環境づくり。社会全体でIT化、リモート化は加速する、人の働き方も変化するので、どういう所に障害者雇用のニーズがあるのか、情報の収集が必要になる。

⑦ 今後どんな社会変化(一例:格差の拡大等)が予測されるか。それに対してグループゆうは、本事業はどう関わることができそうか。

高齢者、ひとり親の家庭と子ども、一人暮らしの若者など、経済的弱者にマイナスの影響が出てくると思う。障がいの子を持つ親も例外ではない。数年してから、影響が増大する恐れもある。様々な救済ネットワークがより必要になり。ゆうの支援事業はますます必要とされる。

人間にとって本当に必要なこと、不要なことがはっきり見えてきた。大都市への一極集中、ファッション界、飲食サービスへの過剰な投資は見直され、自然への回帰、不要なものは作らない、物を大事にする丁寧な暮らし方が見直されてくる。

⑧ 自由記述

ゆうが誕生してから25年、NPO法人になって20年、地元の方に愛され支持され、利用して頂き、ゆうの活動に理解と協力を得るにはどうしたら良いか、模索し続けて来ました。町内のおばあさんに「今日は具合が悪いので、おじいさんの分だけでも弁当を売ってもらえないか」と頼まれ、出来ないことにもどかしさを覚え、又寒空の下で、乳母車と上の子の手を引いたママたちが立ち話をしているのを見て、この母たちに暖かい場所とゆっくり育児の話が出来る場所を提供したいとキッチン歩°歩°を立ち上げました。

サロンを使つての「絵本の読み聞かせ」にはじまり、高齢者の介護部門や地域包括支援センター、町内会の協力もいただいて、「絵手紙教室」「お点前の会」「町内会の新入生歓迎会」「卒業を祝う会」「紅茶の淹れ方」「ハンドベルの演奏会」「ギターの演奏会」「詩吟の会」、頭の体操の「麻雀教室」「折り紙教室」、ゆっぼさんの「体操教室」「ヨガ教室」等、毎回趣向を凝らし、参加者のお迎えにも行きました。

レストランでは、秋には「ぼぼ祭り」で餅つき大会や、「夏まつり」ではヨーヨー釣りやかき氷でお楽しみ頂き、町内会の有志によるワンデイシェフ企画（「手打ちそばの日」「ワッフルカフェ」、フレンチのシェフによる「ランチ会」や「ディナー会」）、**販売コーナー**では、ワークスペース歩°歩°利用者の作品の「裂き織り」「ビーズのストラップ」や「ママたちの手作りバッグやクッション」が並び、**リサイクルコーナー**には町内の方々の洋服や食器がところ狭しと並び、町内外を問わず老若男女の方々にご愛顧頂きました。

販売食品の中でも「すまいる作業所」の手作り豆腐とおから、「ワークスペース歩°歩°」のクッキー類、フェアトレードの紅茶、そしてゆうの薄味で優しい味付けの数々の総菜は、根強いファンが多くいました。そして恒例「ゆう特製のおせち料理」は毎年好評で、予約で一杯でした。**店内、サロン**で楽しく昼食を召し上がったり、お買い上げ下さった多くの皆様の一人一人の笑顔が今でも目に浮かびます。

2018年からは仙台市の助成事業の**子ども食堂**も開設し、「将棋教室」「英語教室」も併設し、可愛い子供たちが笑顔でやってきました。毎回手作りのおやつをととても楽しみにしてくれ、親たちにもとても好評でした。

14年の長きに亘り皆様に愛され、「なくてはならない場所」になりつつある時でした。コロナの影響が全事業に与える影響を考え、法人全体の存続の為、断腸の思いで、キッチン歩°歩°は7月末日閉店いたしました。2020年7月31日、この日はコロナの感染者が全国で遂に1,323人/日を記録しました。

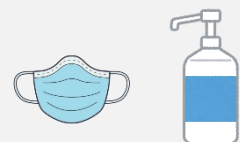
＝コロナ禍で感染予防対策や資金繰りにご支援をいただきました。深く感謝いたします＝

◇個人・企業による支援

- (別記サポーター様) ……寄付金、賛助金
- (匿名個人企業様) ……不織布マスク 500枚、不織布マスク 250枚
- (佐藤様) ……アルコール

◇行政による支援

- (仙台市・宮城県) ……感染予防情報の提供、不織布マスク・グローブ(手ぶくろ)の配布、マスク・消毒の優先購入の枠組み作り、衛生消毒等感染予防物品購入助成、仙台市感染防止た施策奨励金
- (厚生労働省) ……新型コロナウイルス感染症緊急包括支援事業
 - 「介護・障害福祉慰労金事業」
 - 「感染症対策を徹底した上での介護・障害福祉サービスの提供支援事業」(感染予防備品の購入補助)
 - 学校休業等給与助成
 - 福祉事業所への布マスク配布
- (宮城県労働局) ……雇用管理改善推進のための講師派遣
- (通産省) ……リモート環境のセキュリティー等整備の指導
- (財務省・厚生労働省・経済産業省等) ……コロナ資金繰り資金の貸付



等

NEW職員紹介

高齢者介護（助け合い）

ほりうち みよこ
堀内 美代子さん

2019年8月



・趣味・特技…山歩き、草花いじり
・好きな言葉…明けない夜はない
・抱負…無理せず、心に寄り添ってのお手伝いが出来ればと思います。

高齢者介護

(ヘルパー)
おがた じゅんこ
緒方 純子さん

2020年1月



・趣味・特技…テニス、お菓子作り
・好きな言葉…縁の下の力持ち
・抱負…利用者さんの「ありがとう!!」の言葉でヘルパーを続けられそうです。

・趣味・特技…体を動かすこと
・好きな言葉…よく食べてよく寝る

・抱負…楽しんで仕事をしながら、沢山の事を吸収できるようにがんばります。

仙台市サンホーム(保育士)

にしざわ ななこ
西澤 和々子さん

2020年4月



高齢者介護

(助け合い)
かいほ ひとえ
海保 史枝さん

2020年11月



・趣味・特技…庭いじり
・好きな言葉…急がなくていいんだよ。
・抱負…お年寄りの気持ちに寄り添って、笑顔で接します。

ワークスペース歩°歩°(職業支援員)

なかむら
中村 みゆきさん

2020年9月



絵：7歳の息子さん
書いた似顔絵

・趣味・特技…読書、料理
・好きな言葉…ありがとう
・抱負…毎回勉強の日々です。少しでもお役に立てるよう努めて参ります。



スタッフリレー

職員が職員にバトンを渡し質問したり、仕事以外の自由記述から普段は見えない素顔を紹介するコーナーです。第四走者「阿部和樹さん」から第五走者「澤里森子さん」へバトンが渡されました。

●第五走者：澤里 森子

●所属：高齢者介護・障がい居宅支援

●勤続年数：15年

●出身地：三重県



?年前

澤里さん教えて! ※阿部和樹さんからの質問です

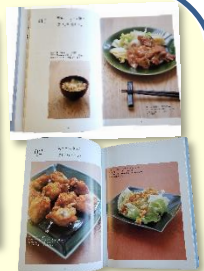
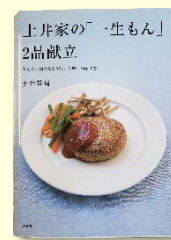
- 趣味・好きなこと：ガーデニング。草取りも好きです。ホッとします♪
- 好きな色は：海の色（海育ちです）
- 人には絶対負けない事：“天然”と言われます
- 好きなテレビ番組は：スポーツ番組
- 行ってみたい国とその理由：ニューヨーク！
海外通の利用者様にお勧めを聞きました♪

おすすめ

料理本紹介

土井家の「一生もん」
2品献立

みんなが好きな
「きれいな味」の作り方



家庭料理人の第一人者であった料理研究家故・土井勝氏の次男『土井善晴氏』のことば

「おいしい味」とは「きれいな味」
自然の素材をていねいに扱って、そのうまみを生かすためによけいなものを加えない。澄んだきれいな味の料理。味も色もにごっていない。形もくずれていない。(中略)ひとが食べることを考えた ひとのことを思いやるやさしい料理こそが おいしい料理。

～土井家の「一生もん」2品献立 みんなが好きな「きれいな味」の作り方～より

我が家の一番手に取りやすい所には、私が結婚するときに母から渡された土井勝氏の料理本と、今回紹介した土井善晴氏の料理本が置いてあり、家族で活用。『基本』を確認しています。



第五走者 澤里森子さんから、仙台市サンホームの田部 愛貴さんにバトンが渡されます。次号もお楽しみに！

目指せ「くるみん認定」!
「子育て支援」行動計画

グループゆうは子育てサポートの充実を目指して目標を更新しました。

【期間】2020～2022年

【達成を目指す内容】

- (1) 産休・育休の取得…80%
- (2) 有給休暇の取得…80%
- (3) ノー残業デー…週1回

現在、(2)と(3)については未達成です…各自が意識して頑張りましょう!!

※「くるみん認定」とは…「子育てサポートを充実している事業所」として厚生労働大臣の認定を受けること

職員募集

- ◆募集事業所◆ 仙台市サンホーム/ピーターパン/ワークスペース歩°歩°/介護・居宅
- ◆募集人数◆ 常勤職員、非常勤職員 若干名
- ◆資格◆ 保育士、児童指導員、心理士、社会福祉士、介護福祉士、ヘルパー2級 等



※事業により資格要件がありますのでお問合せください。



連絡先：022-376-7665 (中村)

介護事業所 移転のお知らせ

仙台市泉区南中山 3-15-15 から、本部二階に引っ越しました。

新住所 → 〒981-3212 仙台市泉区南中山 2-2-3 ☎022-348-4880

グループゆうの活動への賛助及びご寄付 (R1年7月～R2年10月)

《賛助会員》(※敬称は略させていただきます)

認定 NPO 法人あかねグループ、阿部英司、阿部宣子、安部律、石田春子、市橋章子、伊藤博保、伊藤有香、梅津工司、梅津幸枝、大島文子、岡田勝、小田聡、小山次男、柏貴之、加藤幸治、鎌田晴江、北川奈々、木村雅彦、木村良子、興野秀子、小松原靖子、近藤満、佐賀美恵子、佐々木慶三、佐藤恵子、佐藤ひろ子、椎名正子、白木悦子、菅原あつ子、高橋裕美、高橋八重子、谷美慧、谷美輝、(有)田畑会計事務所、千田常子、豊田ゆみ子、中村義光、濱谷幸子、早坂孝雄、原田ひとみ、(株)東日本基礎、深畑亮、フリースペースソレイユ、松岡二三、松田博之、森房雅子、本橋尉、吉田洋子、匿名希望1名

《寄付者》(※敬称は略させていただきます)

阿部慶子、阿部大河、阿部真理子、荒海忠彦、有路通夫、有路通子、池田敏彦、石井綾子、石田春子、石山三郎、梅津幸枝、海保邦夫、神場喜久子、菊池律子、木村雅彦、木村良子、境田静、齋藤真瑠、齋藤好恵、品川稔、清水福子、清水八千代、菅原知子、鈴木寿恵、医療法人社団清山会、高橋和江、高橋静子、滝田誠、寺田光代、飛田亜希、長岩須美子、中尾貞雄、永原敏男、野口直樹、早坂郁子、ぱれった・けやき宮城野、藤田佐和子、藤原英生、村井義昭、本橋尉、八巻久美子、山崎洋子、渡邊清乙、渡辺令子、理事3名、匿名希望13名

ご支援ご協力ありがとうございました!

ご寄付は、制度^{アルファ}プラスαの「あったらいいな」の支援のために使わせていただきます

賛助会員会費とサポーター寄付の振込み方法

挟み込みの振込み用紙にてお振込みください。郵便局の窓口・ATM どちらからでも可能です。もしくは、下記の振込先へ、お振込みください。

■賛助会員会費：個人…一口3000円/団体・法人…一口10,000円 ■サポーター寄付：一口3000円

ゆうちょ銀行
から振込み

銀行：ゆうちょ銀行 名義：グループゆう
記号：02270-3 番号：42421

他の金融機関
から振込み

銀行：ゆうちょ銀行 名義：グループゆう
店名：二二九 店 店番：229
預金種目：当座預金 口座番号：0042421

●寄付金控除に必要な領収書を送付いたしますので、お手数ですがお電話にてご連絡先をお知らせください●

編集後記

昼食はずっとゆうの弁当に依存し、今は向かいのパン屋さんに依存中。そこが休みの月曜日、時々弁当を持参するが、自分の作った弁当の冷めた味を初めて知った…。30年余り弁当を食べ続けていた夫は何も言わなかった。いや「何も言えなかったの？」

今号の事業 TOPICS では『コロナ禍の記憶』を掲載しました。厳しい状況下での苦悩と葛藤、工夫や発見、スタッフの熱い想いが綴られています。ぜひ、ご一読いただけたら幸いです。

発行：認定 NPO 法人 グループゆう
〒981-3212 仙台市泉区南中山 2-2-3
TEL/FAX:022-376-7679